

重商主義思想における人口論に ついての一考察

佐 原 昌 弘

I

周知のごとく重商主義の時代は、近代国家の形成期であり、それとともに国民経済が出現した時代である。従って、その政策は国家権力のもとに、新世界に植民地を領有して経済地域を拡大するとともに、輸出の促進と輸入の阻止とをはかり、有利な貿易差額の獲得を目指したものである。またそれは国内的には、国内産業の促進的統制を企図したものであった。他方では、それは民族的国家を強化しようとした絶対君主の勃興する力の表現として把握することができるであろう。従ってこの政策を推進した重商主義者達の理念や政策は、国王の力や富を増進させることや、かつての土地貴族の影響を減少せしめる目的のために商人階級の繁栄を保証し、増進させることを意図したものであった。また民族的国家の統一が成し遂げられた要因のひとつには、このような土地貴族からの出費と富裕な商人達からの税収入があった。すなわち、それは時の主権者が間接的に彼らの向上を図ることによって、自分自身をも富ましていこうとしたものである。

重商主義は、ほぼ15世紀半ばから18世紀半ば——ルネッサンスの時代から絶対君主が衰えていった時期——の約300年間、イギリスを中心としたヨーロッパ諸国において近代国家の経済政策を指導した理念であった。その間、重商主義者は重農学派や古典学派のような、思想的な学派を形成することはなかった。

彼らは、ただ主権者のために多くの政策的な助言を残しただけであった。しかし、それでも彼らの残した書物を丹念に読むことによって、重商主義思想のある基本的な理論を見つけることができる。本質的には、重商主義は古典学派の厚生経済学——welfare economics——に対立するものとしての力の経済学——power economics——と言えるものであろう。なぜなら重商主義者達の経済活動の目標は、個人の福利ではなく、むしろ国家の榮譽と力にあったからである。だから、そこではわれわれ人間が究極の目的として考えられたのではなく、ひとつの手段として考えられたのである⁽¹⁾。

人口に関する重商主義者の理念は、この人間についての見解をも非常に熱心に論述している。重商主義者達は、殆んど大きく成長した人口が国家やその支配階級——これらの著述家達の大部分が属していた——にとって有益な存在であるということを確認していたのである⁽²⁾。すなわち、それらの極く僅かな人達の利益のために重商主義者は誇張した偏見を述べたのである。私はこの小論において、彼らが唱えた人口論をできるだけ分類・紹介し、若干の考察を試みるつもりである。

II

重商主義は、歴史的に見ると、黒死病や百年戦争によって人口が減少した時期と密接に関係している。すなわち、この人口の損失を埋め合すために意図された思想であるとも理解できるのである。この黒死病は1347年からヨーロッパに広まり、多くの地域で住民の大半がこの病気に屈したのであるが、その結

(1) Cf. Overbeek, J : Mercantilism, Physiocracy and population theory, *Econ.int.* 28 (1/2), p. 129.

(2) 下記の文献に詳しい。

C. E. Stangeland, *Per-Malthusian Doctrines of Populaton*, Columbia University Press, 1904, p. 356.

J. J. Spengler, *French Predecessors of Malthus*, Octagon Books, 1965, p. 398.

果、都市でも農村でも人口が次第に減少していく傾向にあった。この人口の減少は、そのすぐ後に、経済的危機をもたらしたのである。他方、百年戦争(1337—1453)もまた生活破壊をもたらした。そのうえ、当時は幼児の死亡率も極めて高いものであった——それは19世紀の偉大な医学的発見が成されるまで大きな問題であった——。これは、とりわけ労働者のみじめな雇用関係が大きく影響して、ますます増加する傾向にあった。従って、この時代においては人口の高い誕生率が、将来の労働人口を確約するためにも必要不可欠なものであると思われたのである。

先にも述べたように、重商主義がしばしば力の政策と考えられる所以は、国際的な闘争と妬を必然的に持ち合せたからである。それぞれの国家がその競争者を支配し、その相手の裏をかき、彼らの力をその基盤から消滅させたいと願っていたのである。いわば緊張状態の連続であった。このような国際関係の哲学は、絶え間ない戦争を引き起したばかりでなく、夥しく成長した人口のみが保証しえた兵士達や水兵達の豊富な供給を必要としてきたのである。ちなみにB.マンディビル(1670—1733)は、成長した人口が「尽きることのない海軍や陸軍の養成所」であったと強調している⁽¹⁾。またJ.ボーダン(1530—1596)は、人口問題を独立して取りあげてはいないけれども、『マレトロワ氏のパラドックスへの回答』や『国家六論』において、詳しく人口政策について触れている。すなわち『人間なくしては富強共になし』、故に人口過剰は断じて恐るゝの要無しと。蓋し仏蘭西は決して、古来食物の供給に窮せず。仏蘭西の鉞山——小麦、藍、ブドウ酒——は汲めども汲めども無尽蔵なれば、多大の人口を養ふを得べければなり」と彼は主張するのである。要するに、彼は人口増加こそ富国強兵の源であると考えてるのである⁽²⁾。

また人口増加に関する重商主義者の目論見には安価な労働力の供給を増補することにもあった。彼らはその安価な労働力でつくられる国内生産物が、外国

(1) B. Mandeville, *The Fable of the Bees*, ed., F. B. Kaye, Clarendon Press, 1924, Vol. I, p. 287.

(2) 竹内謙二『重商政策発達史』, 日本評論社, 198—199頁参照。

市場において、他の国々の生産物と有利に競争することができ、結果的に貿易差額は順調となり、金銀が流れ込み、国家の財宝は充満されることになろうと確信したのである⁽³⁾。重商主義者であるC.ダヴェナント（1656—1714）は次のように説明している。「人民の労働と勤勉とによって、ある国は差額の受取超過者となるに違いなく、従って人民は軍事力と富とのために第一に重要なものであるからどんな政府もその増加或は減少を注意深く観察し、増加するように配慮しなくてはならない⁽⁴⁾」

そのうえ、農奴制は以前にもまして生産の労賃を下げる作用を引き起したので、論理的に奴隷制度に帰ることを提唱する者⁽⁵⁾もあったが、それは宗教上においても、道徳上においても時代錯誤な逆行であった。

重商主義者は、一般的な傾向として、人口増加のために移民を余儀なくされた結果、繁栄を導いた国々からもまた多いに影響されていた。その顕著な例として、よくオランダが引用された。しかし彼らは、オランダがどのようにして繁栄の道を歩んでいったのかを深く研究することなしに、単に人口密度と繁栄が常に大きく関係があるとしたのである。そして人口の増加と集中が刺激となって、社会や経済の発展を引き起したと結論づけた。このことをC.ダヴェナントは次のように言っている。「人民が一国の真の力と富である⁽⁶⁾」さらに「多くの人民が限られた領土に制限されるとき、彼らは、発明、儉約、勤勉の必要性にかられた。そしてそれらは、一国においていつも力と富で償われるのである⁽⁷⁾」また他の箇所ではダヴェナントは、小国や人口の集中がなされていない国々において、次のようなことが起るであろうと述べている。「人口密度の

(3) 重商主義思想が金銀の過大評価によって性格づけられたことからすれば当然である。

(4) C. Davenant, *An Essay Upon the Probable Methods of Making People Gainers in the Ballance of Trade*, St. Paul's Church-Yard, 1699, pp. 24-25.

(5) フランスの重商主義者でJ.ロウの秘書でもあったJ.F.ムロン（1675-1738）などが唱えた。

重商主義思想における人口論についての一考察

薄い国々では人民はいつも誇りと貧しさと怠惰とめめしさを育てる⁽⁶⁾。W. テンプル (1628—1699) もまた「貿易と富の一般的な背景は、彼らが住んでいる領土に比例する人口の数にある。人口が多ければ多いほど彼らは一生懸命にすべての必要なものを作り、そして勤勉とケチを押しつけるのである。これらの習慣——必要から最初に育つもの——は、やがて一国に不断のものとなり、彼らはどこでもそのようになり、その場所は交通と富において大きく育つに違いない⁽⁶⁾」と述べている。このようにテンプルは富を生産するものとしての労働を重視し、人口の増大を望むとともに、実質賃銀の高騰は勤勉と改良との敵であるとしたのである。

Ⅲ

人口理論と賃銀や労働に関する思想との関係もまた注意されねばならないだろう。大部分の重商主義者達は、労働者が生きるために非常に勇気があった反面、非常に怠惰でもあったということをよく知っており、次のように主張したのである。労働者は自分達の生活を維持するための収入を稼ぐだけは労働するだろうから、その賃銀の増加も生活のための最小限の必要度によるべきであり、働く意志のある日雇労働者または時間労働者の数を減少させることであると。1771年にアーサー・ヤング (1741—1820) は次のように書いている。「下層階級は、貧しさが維持されねばならない、さもないと勤勉にはならないだろう……彼らは貧乏であらねばならない、そうでないと彼らは働かないだろうということを白痴以外だれもが知っていた⁽¹⁾」。

(6), (7), (8) C. Davenant, *An Essay Upon Ways and Means of Supplying the War*, Tonson, 1701, pp. 140-141.

(9) Sir William Temple, *The Works of Sir William Temple*, Hamilton, Weybridge, 1814, p. 2.

(1) E. S. Furniss, *The Position of the Laborer in a System of Nationalism*, Houghton Mifflin, 1920, p. 118.

雇用されることによって得られる稼ぎと労働の量との間に、否定的な相互関係が存在するばかりでなく、賃金と怠惰と放蕩との間にも、それとは反対に、肯定的な相互関係が存在したと重商主義者は言う。例えばJ.ハウトンは次のように説明した。「framework knitters や makers of silk stocking が、自分の仕事に対して大きな報酬を得たとき、彼らは月曜日や火曜日に仕事をするとは滅多になく、それらの時間の多くを酒場やボーリング場で費した。織手——月曜日に酒を飲むことは彼らと同じである——は、火曜日には頭痛になり、水曜日には彼らの手先が狂ってしまう⁽²⁾」

国家的利益が、労働者達に国家的生産力を最大なものにするための最善の努力を要求して以来、重商主義者達は、その賃金で生活最低限の必要度に近い状態を維持していなければならないと主張した。そしてこの状態を維持していくためには、人口増加を刺激することが最善の方法であるとするのである。長期的に、高い人口統計上の増加率が、労働の供給力を増加するために、賃金を押し下げる要因となる傾向にあったからである。

IV

重商主義者達の人口論は、その時代の宗教的風潮によってもまた大いに影響された。その初期重商主義は、宗教改革とほぼ同時代に起っている。宗教改革者達は、引き続き旧約聖書に基いた禁欲主義的な見解を堅持しながらも、極力中世紀的な隠遁主義を排斥して、現世肯定主義の立場をとり、新しい福音の精神をささえとして君主と俗権の存在を承認したのである。とくにマルチン・ルッターは、近世のカトリック教が支持した禁欲主義を、——聖アウグスチヌスの考えに近いのであるが——三つの点から非難する。「第一に、いかなる主任司祭もだれか女性をもたないわけにはいかない。単に弱さからというのではなく、むしろ家政のためにです。それでは、彼はだれか女性を置くべきで、教

(2) *Ibid.*, p.121.

重商主義思想における人口論についての一考察

皇もこれには同意するが、しかし妻にはしてはならないとでも言うのでしょうか。これは、一人の男と一人の女を二人きり一緒にしておいて、しかも過ちを犯してはならぬ、と言う以外の何でありましょうか。あたかも藁と火を一緒に置いて、けぶらせまい燃やすまいとするのと同様であります。第二に、教皇はそんなことを命令する権力をもってはいない。ちょうど、飲食や自然の排泄、あるいはふとるといったことを禁ずる権力をもたないのと同じことです。だから、だれ一人そんな命令を守る義務はない。……第三に、たとえ教皇の法律がそれを禁じていても、教皇の法律に反して結婚生活が始められた場合には、もう彼の法律は終わり、それ以上の効力をもちません。なぜならここで、男と女との間を何びとたりとも引き裂いてはならないと命ずる神の掟は、教皇の法律よりはるかに優先するのであって、教皇の掟のゆえに神の掟が破られたり、なおざりにされてはならない⁽¹⁾。」そして彼は結婚問題の現実を次のように把握する。「猫も杓子も坊主や修道士になるように養成されているのですが、そのうちで生活の資への追求や、結婚しては食べてゆけないのではないかという疑い以外の動機から僧籍にはいる者は、百人に一人もいないのではないか、と私は危惧するのであります。だから、彼らはその前にうんと無軌道な生活を送り、世にいわゆる若気の過ちをやり終えてしまおうとするのですが、実際見聞するところから明らかなとおり、むしろかえって過ちに深入りしてしまうのであります⁽²⁾。」このことに対してルッターは「貴君が妻をめとしては生活を立ててゆけないほど神により頼むこと弱く、この不信ゆえに聖職者たらんとするのであれば、私は、ほかならぬ貴君のたましいの救いのために、聖職者とならないで、むしろ百姓かそれとも何か貴君のなりたいたいものになってくれとお願いする。なぜなら、俗界の生活の資を得るにも神への信頼がなくてはならないのなら、聖職身分にとどまるためには当然その十倍もの信頼が必要なのですから。もし貴君が、神は俗界において貴君を養うことができるということを信じ

(1) マルテン・ルター「キリスト教界の改善について——ドイツ国民のキリスト教貴族に与う——」（『世界の名著18』所収）成瀬治訳、中央公論社、138-139頁。

(2),(3),(4)同上、178頁。

ないのならば、どうして神が貴君を聖職者として維持することを信ずる気になれますか⁽⁵⁾。」として、神はその命令に従う者を生活の必需品を欠くような状態にはしておかないだろうというのである。そして彼は結婚の効用と奨励を「政府当局が気を配って、若い人々を結婚させる手だてを考えてやったならば、めいめいにとって結婚生活への期待は、誘惑に耐え、これを防ぐのにきわめて大きな助けとなるでしょう⁽⁶⁾。」と結論づけたのである。

また J. B. ボッスュエ (1627—1704) のような旧教の労働者達は、国家の大望に一致する宗教を持ってきた。そして再三、最大数の人口の適合性を強調したのである。彼の主張のひとつには「大勢の人口は、キングの繁栄であるが、それら大勢の人々の欲求は、プリンスの破壊である⁽⁵⁾」ということが述べられている。また彼は他の箇所でも「立派なキングによって統治されている国において人々の群を見ることは何と素晴らしいことであろうか⁽⁶⁾」「巨大な人口は立派な軍隊のために許したのである⁽⁷⁾」などと述べ、聖書に依拠することによって人口夥多を望ましいものであるとしたのである。

V

では、今まで述べてきた重商主義者の人口問題に関する理念は、実際的な場面——政策面——において、どのように反映されてきたのであろうか。この点についても若干の考察をしておこう。

ヨーロッパの国々において、その理念は、独身生活や子供のない生活への差別として実施されたのである。その差別の多くは、独身男性に対する行政面での仕事への割り当てに重点が置かれた。スペインでは、25才以前に結婚した人達に対して税の免除を与える法律がつくられたし、フランスにおいても移民が禁止された。フランスのルイ14世の知遇を得て財務総監等を歴任したコルベール (1619—1683) は、20才以前に結婚した人達に、25才まで、すべての税を免

(5), (6), (7) J. B. Bossuet, *Oeuvres De Bossuet*, Vol. 1, p. 457.

重商主義思想における人口論についての一考察

除する法律を立案した。また生死の関係なく12人の子供達を持つ父親ばかりでなく、生存している10人の子供達を持つ父親にも公的な義務から解放される特権を与えた⁽¹⁾。しかも生存する10人の子供達を持つ父親には、毎年1,000リーブルの手当を与えた。また生死を問わず12人の子供を持つ父親には、毎年2,000リーブルの手当を与えた⁽²⁾。同じような特典は、フランスのカナダ領植民地においてもまた有効的に実施された。例えば、20才以前に結婚した若い男や16才以前に結婚した少女には20リーブル与えられたし、大家族には財政的償いを授けた。また10人の子供を持つ父親には、毎年300リーブルの手当を与え、12人以上持っている父親には400リーブルの手当を与えた⁽³⁾。その他にも種々な特典が与えられた。しかし結婚市場における花嫁候補者の不足は、非常に深刻であった。そのために若い女性達は、花嫁とともに大西洋を越えて植民地に送られたのである。

Ⅵ

重商主義期の作家達が残した以前に、人口論について注目すべき発言をしている一人の著者にG.ボテロ(1540—1617)が居る。彼は二つの論文においてその理念を発表した⁽⁴⁾。彼は普通の重商主義者と等しく、人口増加の利益を主張すると共に、さらに深く人口問題の真相を究めて、後にマルサスの法則として知られる人口増加に関する法則を表明するに至ったのである。

すなわち、ボテロはその年代の重商主義者達と同じように、人口増加を崇拜したけれども、他方で彼は、人口増加は、終局的に、自然的害悪や結婚の回避

(1) 主な税は、財産や収入に直接課税される人頭税であった。

(2) リーブルはポンドを意味する。またリーブルは後にフランによって取って代られたが、フランスの国家的貨幣単位であった。

(3) Cf. F. Parkman, *France and England in North America*, Vol. Ⅱ, ch. 13.

(4) *Della ragion di stato*, Venice, 1589.

Della cause della grandezza delle citta, Rome, 1588.

や移住によって阻まれるものと考えた。彼が生きた世紀以前の3,000年間で人口規模においては、さして大きな変化はなかったと信じたからである⁽²⁾。

彼によると人口の量的な変化は、二つの要因によって説明されるというのである。一つは、人間の生殖力であり、この人間の生殖力は際限がなく、歴史を通じて不変のまゝである。しかしながら、二つめの要因である自然の滋養力、はひとつのコミュニティの利用できる土地の総計によって制限されるのである⁽³⁾。このことから彼は、ローマにおける人口の安定を説明する。ローマ人の生殖力是不変に持続したが、ローマの自然の滋養力拡張の失敗が、その人口増加を妨げた——死亡率が上昇し、それから逃れた人達のうち極く僅かな人達は結婚し、なお他の人達は外国に移住した——というのである。

以上、ボテロの見解において、人類の苦悩の大部分は生存に必要な手段の欠乏、あるいは不足によって説明される。すなわち彼は、すべての人類の侵略、戦争、強盗、鬭争といった問題は、食糧の不足、欠乏——飢饉——に帰結されると主張するのである。

それ故に、ボテロは生産高の不足が、与えられた領域の人口を制限するのであるから、その君主は、農業や産業の発展を促進するということに着目すべきであると結論づけている。このように重商主義期の人口思想の根底には、拡大する人口を増加させ、準備させることが、生存のための有益な手段であるという認識が存在していたのである。

(2) Giovanni Botero, *The Reason of State*, translated by P.J. and D.P. Waley, & *The Greatness of Cities*, translated by Robert Peterson, 1606, Routledge & Kegan Paul, London, pp. 275-276.

(3) *Idib.*, pp. 276-277.